

厚生労働科学省研究費補助金（子ども家庭総合研究事業）

平成 15 年度厚生労働科学研究費補助金子ども家庭総合研究事業
「多民族文化社会における母子の健康に関する研究」

外国人妊産婦に対する看護専門職者の姿勢
意思疎通の観点から言葉の問題を中心として

佐藤春美¹⁾、大関信子²⁾、牛島廣治¹⁾

1) 東京大学大学院医学系研究科発達医科学教室

2) 青森県立保健大学健康科学部看護学科

研究要旨

外国人が医療機関を受診する際に医療機関側が抱えている一番大きい問題は言葉であり、これは分娩期においてもあてはまる。看護専門職者（以下、主に助産師や看護師を示す）は外国人妊産婦（以下、外国人で分娩期にある女性を示す）が快適に分娩を終えられることを目標にし、その看護専門職者が意思疎通の問題をどのようにとらえているのか現状を把握し、問題点を発見することを目的として分娩に関わる看護専門職者に質問紙調査と面接調査を行なった。調査内容は看護専門職者の経験月数、外国人妊産婦の分娩時の援助の有無、および看護専門職者のできる外国語の有無が、看護専門職者自身の外国語能力、外国人妊産婦の理解、誤解、日本語能力 4 項目の心配にどのように影響しているのかを検討した。できる外国語がない、また臨床経験月数が 36 ヶ月以下の看護専門職者は自分が外国人妊産婦に示したことについて理解しているかという心配が、そうでない看護専門職者よりも大きかった。さらに、外国人妊産婦には日本語会話能力の獲得を期待していると同時に看護専門職者自身の外国語能力の獲得やレベルの向上もあげていた。通訳として妊産婦の夫が分娩に参加することについて、看護専門職者の伝えてほしい情報が妊産婦に伝わっていないことが多いと看護専門職者は感じていた。分娩時に外国人妊産婦との共通した言葉がないときは、外国人妊産婦の分娩時に適切なケアが行なわれていない可能性が示唆された。その解決として、妊産婦の希望や訴えを十分受け入れ、文化的な相違や看護専門職者の外国語能力での差別や偏りを生じさせないためには医療通訳制度の導入が分娩期にも必要であると考えた。

A. はじめに

平成 14 年の外国人登録者全体の 53.9% は 20 歳から 39 歳までである。このことは外国人が労働力の主な年齢層というだけでなく、日本において妊娠、分娩、子育てを経験する可能性が高いことを意味している。異文化の中で分娩を経験することはかなりのストレスであると思われる。一方、看護専門職者も外国人妊産婦の援助を行なう上でいくつかの不都合を感じている。陣痛開始、破水、出血など予測がつかず、異常と表裏一体にある産科の領域においては妊産婦の習慣や風習とあいまって、看護が密になり、言葉や習慣を軽視して援助はできないと考え

る。日本の医療機関において外国人が受診するときに医療機関側が問題としてあげた一番の問題は言葉である。外国人の分娩の約 94% が病院と診療所で扱われていることから、このことは産科にも当然あてはまる。このような状況の中で、看護専門職者の立場から外国人妊産婦との意思疎通についての現状を把握し、問題解決に導く手立てとして本研究を行なった。

B. 研究の目的

看護専門職者が意思疎通の問題をどのようにとらえているのか現状を把握し、問題点を発見する。

C. 対象と方法

1. 調査対象

2003年8月から12月まで、産科あるいは産婦人科病棟で勤務している看護専門職者で、分娩期、期の看護、あるいは分娩介助をしたことがあり、必ずしも助産師でなくても、分娩経過において妊産婦に付き添い継続的に援助する、またはしたことのある看護師でも良いとした。しかし、ナースコールになったときだけ、など一時的に接する看護専門職者は除外した。年齢、国籍、職業的な地位、勤務形態などには基準を設けなかった。

2. 調査方法

質問紙調査

言葉を中心とした意思疎通について、看護専門職者のできる外国語の有無、外国人妊産婦への援助の有無、臨床経験月数、看護専門職者自身の外国語能力、看護専門職者が示したことを外国人妊産婦が理解しているか、誤解しているのではないか、外国人妊産婦の日本語会話能力4項目の心配について、どのように影響しているのか検討した。

半構造化面接調査による内容分析

外国人妊産婦への援助の経験のある看護者に、基本的には1対1の面接調査を行なった。調査内容は、外国人の分娩についての印象、経験、思ったこと、感じたこと、言葉による意思疎通がとれなかったときの方法、気持ち、通訳の有無などを聞き取り調査した。

D. 結果・分析

1. 質問紙調査

調査の許可を得た施設は全部で6つであった。質問票の配布総数は全部で80部、回収数は59部で回収率は73.8%であった。有効回答数は58部で有効回収率は72.5%であった。看護師は4名、助産師は54名であった。平均の臨床経験月数と標準偏差は 90.78 ± 87.5 ヶ月、範囲は6ヶ月から360ヶ月であった。外国人妊産婦の分娩期、期の看護、あるいは分娩介助の経験があると答えた看護専門職者は55名(94.8%)、ないと答えた看護専門職者は3名(5.2%)であった。できる外国語がないと答えた人は48名(82.8%)、あると

答えた人は10名(17.2%)であった。(表1)

意思疎通の心配について、外国人妊産婦の分娩経過において援助するとき看護専門職者自身の外国語能力の心配は、“かなり心配する”だけで34名(57.9%)おり、それに対して外国人妊産婦の日本語会話能力の心配は“かなり心配する”と“まあまあ心配する”を合わせて33名(57.9%)で、相手の日本語能力よりも看護専門職者自身の外国語能力を心配している傾向が伺われた。(図1)

臨床経験月数で、“かなり心配する”“まあまあ心配する”を“心配する”群とし、“少し心配する”“ほとんど心配しない”を“心配なし”群として、²検定、あるいはフィッシャーの直接確率検定で両群を比較した結果、有意水準5%未満で有意差があったものは、臨床経験月数36ヶ月以下の人で、“自分が示したことを外国人妊産婦が理解しているかという心配”が臨床経験月数が37ヶ月以上の人より大きかった。(表2)

“できる外国語があり”群と“できる外国語なし”群を比較し、上記同様、²検定、あるいはフィッシャーの直接確率検定を行なった結果、有意水準5%未満で有意傾向を示したものは、“自分が示したことを外国人妊産婦が理解しているかという心配”で、“できる外国語なし”群の方が“あり”群より心配の度合いが強かった。(表3)

外国人妊産婦の分娩期、期の看護、あるいは分娩介助の経験の有無について、有意差はみられなかった。

2. 面接調査

参加者は8名で、全員助産師であった。1対1の面接調査であったが、希望で1組だけ2対1で行なった。面接時間は30から50分であった。

外国人妊産婦の日本語能力への印象

・国籍や産婦の置かれている状況(二世、三世でなどの代から日本で生活している人とそうでない人)でそのレベルは異なる。全く日本語が話せない外国人妊産婦は少ない

意思疎通が難しいときの場面

・怒責の誘導をするとき

- ・ 分娩進行が切迫してきたとき
- ・ 看護専門職者から何か妊産婦にケアをしたいとき
- ・ 看護専門職者にとって苦手なタイプの妊産婦を担当し、看護専門職者がその妊産婦に受け入れられないとき
- ・ 妊産婦の要求や希望がわからないとき
- ・ 看護専門職者の説明を妊産婦が理解しているかわからないとき
- ・ 緊急時
- ・ 通訳として夫がその役割を十分果たしていないと思ったとき

意思疎通が難しいときに実際に行なった方法

- ・ 日本語（簡単な日本語、相手のわかる日本語）で話す
- ・ 筆談（漢字、英語の単語）
- ・ 辞書（看護者側、産婦側）の利用
- ・ 翻訳パネル・カード
- ・ 妊産婦の言葉のわかる夫や友人、学生の参加
- ・ 緊急時は医師から説明
- ・ 看護行為のみで話はしない
- ・ 実際に妊産婦に接してから方法を見つける

意思疎通が難しいときの受け止め

- ・ 産科的なリスクのある妊産婦は心理的に負担になる
- ・ リスクがなければ気にならないし、分娩自体はどうにかなる、乗り切れる
- ・ 最初に妊産婦に接するときは心理的に構えたり、敬遠したいと思うが感情的には嫌だとはならない。しかし、業務上の負担が大きくなるのではないかと心配する
- ・ 言葉が通じないことで心理的な負担を感じているときは妊産婦から足が遠のく

外国人妊産婦に通訳として夫が付き添うことについて

- ・ 夫から妊産婦へは看護専門職者が言ったことが全部伝わっていないことが多く、夫の中で情報を取捨選択しているのかもしれない

- ・ 分娩やその経過を夫が知らなくて、妊産婦の状況に恐怖を抱き、冷静な気持ちでないためうまく通訳できていないかもしれない

言葉による意思疎通の問題についての解決方法

* 看護専門職者の外国語能力

妊産婦の訴えを聞き、安心感を与えたり説明することを妊産婦の言葉でできたらいいのではないかという観点から、看護専門職者自身が外国語ができたらいいという理想を抱いている。言葉の種類としては英語が主で、その他自分が関わった中で多い外国人の言葉をあげている

* 外国人妊産婦の日本語能力への期待
期待している看護専門職者と期待していない人がいる。期待している人は外国人によってその期待度は異なる。

* 医療通訳の介入について

日本語のできない妊産婦への介入として第三者の通訳者を入れることには看護専門職者全員抵抗がなかった。その条件として分娩のことやその経過を知っており、病院の専属であることを希望している

妊産婦からの要求の伝え方

片言の日本語や日本語のできる人を通して伝えてくる。また実際に行動で示してくる

E. 考察

看護専門職者が感じている意思疎通の問題について、看護専門職者と外国人妊産婦の間で共通する言葉がないときや片言の会話で援助がなされるとき、看護専門職者はおおむね分娩自体はなんとかできると考えている。異常がない限り、分娩の進み方は世界共通のものであるし、分娩を扱う自分の技術レベルに自信を持っていれば問題視していない。また心理的な負担も言葉が通じにくいだけでは少ないようである。ただし、できる外国語がない場合、また看護専門職者としての臨床経験月数が36ヶ月以下の場合は外国人妊産婦が理解したかどうかの不安が、そうでない看護専門職者よりも大きかった。さらに緊急時や産科的なリスクのある妊産婦、看護専門職者にとって苦手なタイプの妊産婦が外国人であり、なおかつそ

の妊産婦と言葉による意思疎通が難しいときは心理的に負担が大きくなると感じていた。

夫が分娩時に通訳として参加することについては、夫の感情や通訳の技術などの理由から看護専門職者は不適切と考えている。それに対して医療専門の通訳者の介入は条件つきで受け入れる意志があると判断できた。

分娩期は妊娠期や産褥期よりも確かに短い時間ではあるが、痛みを伴い、いろいろな不安が生じる。そのような状況の中で妊産婦の要求や訴えを聞き、できるだけ妊産婦が安心して、快適に過ごせるよう配慮が必要である。実際、妊産婦からの訴えは片言の日本語や日本語のできる人を通して伝えてきていた。相手が何を考え、どう受け止めているのか十分把握できないと妊産婦のストレスや不快を最小限にできない。一方、看護専門職者側もケアをしたいのにできない、妊産婦の訴えがわからないなどストレスを感じている。そして分娩経過において正常異常の判断を迫られる場面は少なくない上、ケアをするとき、いつどのケアをすすめるか、あるいはそのケアが妊産婦に合っているのか等の判断を言葉なしで行なうのは心理的な負担になり、さらに妊産婦との間で行き違いや誤解が生じる可能性がある。

全体として、経験的に外国人妊産婦との間で言葉の問題に遭遇していても、それが問題であるにとらえている人は少なかった。意思疎通は言葉だけではなく、非言語的なメッセージももちろん重要である。ただし、感情表現は非言語メッセージの中でも文化によって多様であり、重要度も異なる。ケアを行なう上で非言語的なメッセージから判断することも多々あるが、外国人の場合、果たしてそれが適切かどうか判断するのは難しい。

その解決法として、質問紙調査でも面接調査でも看護専門職者自身の外国語能力をあげていた。看護専門職者個々人が何らかの外国語を身につければいいように考えているようであるが、外国人の国籍が多様化してきており、看護専門職者一人が何ヶ国語も話せることは不可能に

近い上、そのレベルの向上、あるいは外国語一つにしてもその能力の獲得には時間がかかる。また、言語の偏りや看護専門職者間での外国語能力のレベルの違いなど、この解決法は妊産婦にとって必ずしも最適とはいえない。さらにこれは看護専門職者だけでは解決できない問題である。このことを看護専門職者は理解し、分娩時に十分なケアが提供できていないことをきちんと意識する必要がある。そしてそのことを行政側に訴え、医療通訳制度の確立を要求すべきと考える。

F. 謝辞

調査にご協力いただいた医師、看護専門職者の方々に心より感謝申し上げます。

G. 参考文献

- 1) 高橋謙造他． 国際化に伴う母子保健医療の向上に関する調査研究．平成14年度厚生労働化学研究報告書．2002; 125-132
- 2) 法務省入国管理局．
<http://www.moj.go.jp/PRESS/030530-1/030530-1-7.html>
- 3) Judith Schott, Alix Henley. Culture Religion and Childbearing in a Multiracial Society. UK: Butterworth Heinemann, 2001
- 4) No name. Celebrating diversity. Nursing Standard 2000; 15: 15-16
- 5) Sannie Y.S. Tang. Interpreter Services in Healthcare. JONA 1999; 29: 23-29
- 6) Hendrika J. Maltby. Interpreters: A Double-Edged Sword in Nursing Practice. Journal of Transcultural Nursing 1999; 10: 248-254
- 7) Krys Wlodarczyk. The interhospital interpreter project. The Canadian Nurse 1998 May; 22-25
- 8) C. Bradley, C. R. Brewin, S. L. B. Duncan. Perceptions of Labour: discrepancies between midwives and patients rating. British Journal of Obstetrics and Gynaecology 1983; 90: 1176-1179

表 1

施設および対象の属性

	全体 (総数 6 施設)	総合病院 A	産科病院 B	総合病院・医院 C
年間分娩数 (平成 14 年)		1137 件	1145 件	総合病院 225 件 医院 a 421 件 医院 b 情報なし 医院 c 情報なし
全分娩数に対する 外国人の割合 (数)		9.2%	2.1%	5.7% 2.6% 情報なし 情報なし
多い外国籍		フィリピン 韓国・朝鮮 中国	韓国・朝鮮	韓国・朝鮮、中国 フィリピン、中国 情報なし 情報なし
職種 看護師	4 名	なし	なし	なし なし 1 名 3 名
助産師	54 名	19 名	20 名	6 名 3 名 4 名 2 名
臨床経験月数	90.77 ± 87.46	54.0 ± 42.2	80.2 ± 90.6	138.1 ± 99.6
外国人妊産婦の分娩 第 期、 期の 看護、あるいは 分娩介助の有無	あり 55 名	19 名	17 名	6 名 3 名 4 名 5 名
できる外国語 の有無	なし 3 名 あり 10 名	なし 5 名	3 名 2 名	なし 2 名 なし なし なし 4 名 3 名 4 名 5 名

図 1 外国人妊産婦の分娩経過において援助するときの意思疎通の心配について

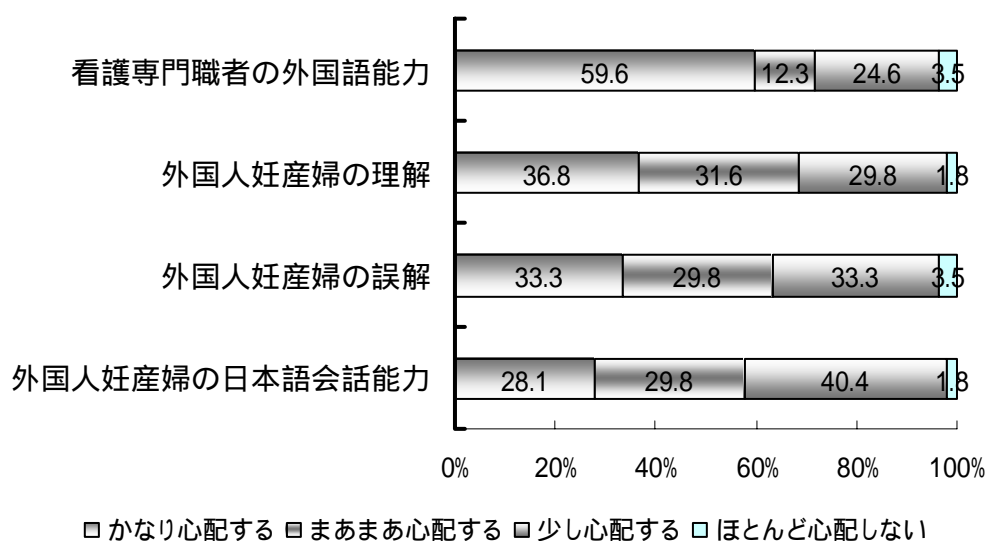


表 2 看護専門職者の臨床経験月数と意思疎通の心配

外国人妊産婦の理解 (N=56)

		外国人妊産婦の理解への心配				合計
		あり・調整済み 残差		なし・調整済み 残差		
臨床経験月数	36 ヶ月まで	18	2.8	2	-2.8	20
	37 から 108 ヶ月	11	-1.7	10	1.7	21
	109 ヶ月以上	8	-1.2	7	1.2	15
合計		37		19		56

$$\chi^2(2)=7.950 \quad p=0.019<0.05$$

表 3 看護専門職者のできる外国語の有無による意思疎通の心配

外国人妊産婦の理解 (N=57)

	外国人妊産婦の理解への心配		合計
	あり	なし	
できる外国語あり	4	6	10
なし	35	12	47
合計	39	18	57

フィッシャーの直接確率検定にて $p=0.058>0.05$